

オヤジの思い出

藤本勇

私の家は大阪市北区で紳士服屋を営んでいました。オヤジは2代目で屋号はシナノヤ洋服店。戦前に鉄骨三階建てのビルまで建てて、北大阪では少しは有名な店にまでなっていました。オヤジは自分では針やミシンはできず、職人にまかせていました。専ら注文をとる営業に専念して店を大きくしました。洋服箱には「三井物産御用達」などと大きく印刷してしていました。



若い時は短気で、客が気に食わないと納めるべき洋服をハサミで切りきざんで捨てたこともあったと聞きました。

私は三男で兄二人は大学をでてサラリーマンになっていて家業を継いでいませんでした。私は大学進学で最初は京大工学部を受験したが、勉強していない者には無理でダメでした。2年目も工学部を目指して受験勉強していると、オヤジから猛反対を受けた。オヤジに「進学するなら大阪市大の経済に行け」と申された。自分の得意先の方に旧制大阪商大の出身者の人が多かった。家業を継ぐのがオヤジの夢だったので。入学試験の発表のときはオヤジが見に行き、電話をかけてきた。わたし以上に嬉しかったのです。

しかし、大学2年の夏にオヤジは高血圧症で倒れて、当時の医学では安静第一でリハビリもやらなかった。中風になって7年寝込んだ。介護保険はなく母親が一人で面倒を見ていた。

洋服屋の借財は、あまり無かったので兄達は「店をたたんだら」と言ったが債権を捨てるには惜しい金額だった。客の給料日に学生服を着た私が集金に出かけた。すると黙って払ってくれる客もあれば「オヤジさんには借金しているが、あなたにはしていない」と申す。「一体どうすれば払って貰えるのですか」と問うと「ズボンの一本でも作れや」

この一言で職人に寸法の取り方・仮縫いの仕方などを伝授してもらい、にわか洋服屋になって頑張りました。それでも難癖をつけて払おうとしない客がいて喧嘩するはめになった。

家に帰ってオヤジに、それを言うと「それは客が怒っているのではなく、客が持

っているお金が怒っている」ともいわれ、また「客に頭を下げるのは、客の持っているお金に頭を下げると思えば、誰にでも頭は下げられる」と言われてオヤジの金銭哲学を学びました。

昭和30年代に入ると町の洋服屋は大手の既製服に押され衰退の道を歩いていた。私が顧客まわりをしているのを叔父に見つかり褒められた。叔父は履物業界の一つである世界長ゴムの社長をしていた。大学卒業後は叔父の世話になった。昭和 36 年に大学山岳会のヒマラヤ登山隊の一員に選ばれヒマラヤの山を登った。



まさに 3 代目で店を閉めるはめになり「唐様で売り家と書く三代目」を地でいきました。

父のこと

神 美代子

「怖い娘におこられて まんねん」とよその人には言い私には「おおきに！」「おおきに！」と言っていた父。母が早く亡くったので20年余り一人で頑張っていました。今から60年前に、西宮市苦楽園に母屋と離れといゆう様なかたちで住みましたので、沢山の思い出があります。明治37年生まれ 日中戦争に行き負傷故大東亜戦争には行きませんでした。定年まで 朝日新聞社に勤め サラリーマンでした。



タブレットで。指1本で打っているので zoomでお話しさせていただきます
ごめんなさい